

京都精華短期大学



1979●入学案内

受験生の側に「どの大学にしよう？」と選ぶ権利があるとすれば、大学側にも「どのような受験生を望むか」というアピールをする権利があってもいいと、ぼくは思う。もともと、受験生が大学を選ぶにあたっては、学力や家計などの事情を考慮に入れざるを得ないだろうが、それでもなお、「大学とはどうあるべきか、どのような大学でどんな学生生活をし、どのような自己形成をしたいか」という自分自身の意志と見識とを、ぜひとももっていただきたい。というのは、大学時代とは、本格的に自我にめざめ自己形成をする一生でもっとも大事な時期で、環境や条件の選択がきわめて重要だからである。受験生のみなさんは、堂々と自己主張をもった大学選びをしていただきたい。

では、われわれは受験生に何を望むか――

本学は京都にあるのだから、まずその京都で学ぶ意味を、考えてほしい。京都とは、古都として過去千年の歴史・文化・伝統・工芸の誇りと重みをもったところで、すば

ひとつの個性として、自己の内面を豊かに充実させている者、充実させようとする者を積極的に歓迎したいし、高校時代の成績や学力よりも、自らを新たに鍛練する努力をおしまず自らの可能性を発見しようとする者を望んでいることが、いくらかはわかっていただけたのではないかと思う。そこで、もっと具体的に、まず英語について、述べてみる。たとえば、英会話では、もちろん発音やアクセントや慣れが、きわめて大切であるが、会話で何をどのように話すか、その内容がもっと大切である。挨拶の英語がいくらうまくても、自らの内面に話す何ものもなく、話す者の主体も感じられないのでは情なさすぎる。いいかえれば、自らの内面を豊かにすることもせず、教科書の文例をいくら熱心に練習してみても、あまり意味がない――ということも、わかっている。また、アメリカやイギリスを学べば、その国語である英語を学ぶことになるが、それだけにどまらず、英語という媒介で、アジアやアフリカも学ぶことができるということも、理解してほしい。また、本学では現に、英語でアジアを学ぼう

らしい面とイケズ(?)で頑固な面とを、もっている。いいかえれば、京都とは、何もない無風地帯ではなく、表面はものやさしいが底にはきびしいものをもつ環境である。たとえば、街のまんなかの寺社の庭や公園、あるいは川や疎水の岸に春は桜の花が咲き散っているが、こうしたことは日本の大都市では、京都以外にはあまり見られないもの。つまり、京都には環境を自分たちで守る毅然とした文化があるからこそ、その美しさを保持しつづけているのだ。その京都で学ぶということは、日本の古来の風土にしっかりと足をつけながら、日本全体にまた世界に対し、自分をどのように位置づけるかの勉強になる。本学は「国際主義」をモットオの一つとしているが、京都で学ぶということが意義深いことを、受験生のみなさんは、大いに自覚してほしい。つぎに、本学では創立以来「人間を尊重し人間を大切にすること」を基本理念としている。われわれはこれを「自由自治の精神」と表現しているが、本学の二〇年の歴史はこの精神をどのように実現するかとい

と呼びかけている外国人教員もいるのだ。ともかく、このような巾ひろく多彩な考えの英語英文科の諸先生であるが、全員一致していることは「英語を学ぶということが、自分の問題意識を発見し、自分の世界を開いてゆくような、そういうきつかけになっしてほしい」という願いである。

たしかに、教育者の側からいえば、型にはめこむ教育がいちばんやりやすく、本学が考えるような教育法は、もっともやりにくいしむつかしい。理解のはやい者もいるし、おそい者もいる。個々人の性格や志向の差もある。もっと大きな問題は、自信をもつてやってゆこうとする者と、一種の挫折コンプレックスをもつていて初めから「自分はダメだ」と決めてかかっている者が、いることである。この後者のコンプレックスは、被害妄想であることが多い。「自分はダメだ」と決めてかかれば、秘められた素質や個性ものびることなく、自分で自分をダメにしてしまう。ダメなのでなく、ダメにしているのである。ダメだと自分で思っていた者が、何かのきっかけを掴んだことにより、驚くほどの成長をとり別人のよう

うことだった、といってもよい。

その精神は、この大学社会を構成する教職員・学生が人間として平等であるという考え方を貫くことである。だから、たとえば、大学を代表する学長の選挙は用務員をふくむすべての教職員による公選であり、学生は拒否権をもつ。また学生が立ち入ってはならないような部屋はひとつとしてない。学長室といえども空いていれば学生が談笑や会議につかっている。学生寮はいくまでもなく自治寮である。しかしこの精神も、大学構成員ひとりひとりの自主性に支えられなければ、実際には何の意味もない。またこの精神を理解し、積極的に大学社会に参加する意味を理解しなければ、どんな知識や技術もほんとうに生きてはこないだろう。本学では、ベルトコンベアの上にならべられて加工されるような、人間を「型」にはめこむ教育は、絶対に排除したいし、暗記力のつよさや断片的な知識の豊かさを評価しないのである。

以上述べたように、われわれは「自由自治の精神」を理解し、ひとりの人間として、になることが、しばしばある。若者の特長は、変わり得ること。本学の教師たちは、それに期待しながら、前述のように、日本語とちがう英語という別の次元の思考方法を学ぶことによって、自分のなにかを見出すきっかけをつくれ――と、提唱しているわけである。

次に、美術の方は、順調にゆけば、一九七九年(昭和五十四年)四月より、四年制美術学部となる。なぜ、短大美術科から四年制美術学部になければならなかったのか。それは、高度の技術を必要とする美術教育では、やはり短大の二年では短かすぎるからである。短大創設以来やっと一一年目であるが、すでに本学出身者の中には関西美術界の若手ホープと見なされている者が数人もいる。その彼ら彼女らにしても、「もう一、二年在学できたら……」と、歎いている。青春時代の一、二年は、成長後の五年一〇年に匹敵するであろうし、青春時代に掴んだものは、一生を左右しかねないものもある。もちろん、芸術とは生涯をかけて追求するものであるが、青春時代に余裕

学科課程概要

もくじ

われわれは受験生に何を望むか

3 学科課程概要

4 一般教育

6 英語英文科

13 専攻科

14 美術科

18 絵画コース

22 デザインコース

デザインクラス

26 マンガクラス

28 染織コース

31 立体造形コース

34 アッセンブリー・アワー

36 学寮

38 卒業後の進路

44 教員組織

46 教職員紹介

53 大学への交通機関



と時間とを持ち得ることの重大さを、ぼくは卒業生から教えられた。とくに美術では、きつかけを掴むと驚くほど目に見えて急成長するものだが、きつかけを掴んで作品に結晶させるには、やはり時間と余裕が必要である。したがって、きつかけを掴まないままに、あたら素質をのばしそこなつた者も必ずいるであろうし、きつかけを掴みかけたのに卒業し就職したため、開花しそこなつている者もいよう。美術学部になり二年だけ在学期間がのびたからといって、そのきつかけを誰しもが必ず掴めるとは限らないが、求め探り悩み励む青春の日々が二年多ければ、それだけチャンスもふえるともいえる。とくに、早熟型でない学生には、二年ふえたことが、貴重な年月にならう。

さらに、四年制美術学部を志向した理由に、次のようなこともある。ぼくは日本の大学を卒業してから、十数年間、欧米に東南アジアに生活してきた。ベルギーの刺繍、北欧の家具、ベニスのガラス、リヨンの織物、インドネシアの染め……世界のあちこちで、まばゆいような工芸品を鑑賞した。しかし、ふり返ってみると、二都市一工芸

のところがほとんどで、京都のように、染・織・漆・陶器・刺繍・竹細工……など数々の工芸を複合的に一都市でもっているようなところは、世界でも実に珍しい。しかも、それらはきわめて高度に洗練された美の伝統を保持している。だから、伝統を継承するにせよ、伝統に反逆するにせよ、あるいは日本的伝統と対決してみるにせよ、この京都という世界でも珍しい美術環境をもつ場所、それぞれが自分の芸術を追求しているという意識を、学生たちにぜひとも持つてもらいたい、切望するのだ。だが、そのためには短大の二年間では、気の毒なくらい短かすぎるのだ。また、現代ではすべてが多極化多元化しているが、芸術も例外でなくなっている。一つを探るといふことは他のすべてを捨てざるものであることも骨身に沁みて知りつつ一道に専念することも重要だろうが、もし既成のあり方は満足できない場合は、いくつかの要素の組み合わせによる開発や、他のジャンルからの技術導入による新しい方法創出の必要もでてこよう。あるいは、美術を密室的私的なものから解放し、都市環境として役立つ

ものにしようという大きな夢をもつ者も、でてこよう。こうしたこと、こうした者たちのためには、やはりどうしても少しでも長い時間が不可欠である。だからこそ、われわれは文部省に必死に働きかけ、諸準備を整えつつ、四年制美術学部を実現しようとしているのである。

教育とは、きつくきびしいもの。そして、学生と教職員との息のあった協同作業なのである。いいかえれば、お互に息のあった教育というきびしい協同作業を、われわれ教職員一同は、みなさんと成功させたいと思っている。それに、予定どおり進めば、みなさんが入学する一九七九年度には、京都精華短期大学は、「京都精華大学」として誕生しなおし、美術学部と短期大学部英語英文科となるから、みなさんは実にその第一回の学生となるわけだ。新しい大学のカラーと雰囲気は、第一年目にできあがる。そのきわめて重大な責任を、みなさんとわれわれ教職員は、わかちあうわけだ。

ひとつ、大いに頑張りあいましよう！

学長/深作光貞

一般教育

「一般教育」という言葉には、一般的で漠然とした印象があり、必ずしも適切な表現といえない。人間と社会と自然のあらゆる領域にわたって全体的、そして根源的な知と力を提供し、獲得することが、一般教育の真の目的である。

一般教育は人文科学、社会科学、自然科学の三部門にわかれ、それぞれがさらに哲学とか政治学とか生態学とかいった個々の学問に分かれている。しかし、いわゆる学問の名称よりもテーマを前面に出し、たとえば「人間の生きかた」とか「憲法を考える」とか「公害と社会」といったような題で講義をしている。講義はできるだけ教師の一方通行にならないように工夫しているが、学生諸君も大いに意見を出してほしい。そのほかに保健理論と体育実技があり、人間の大きな要素である身体について学び、鍛えることを目ざしている。また外国語科目として英語、フランス語、朝鮮語があり、とくに朝鮮語はアジアへの関心を育てるた

めにも大切で、短期大学で朝鮮語を開講しているのは全国に唯一であろう。

要は広く浅くということにならぬよう、さまざまな問題のなかから、自分にふさわしいものを選んで、それを深めていくことである。そのためにも好奇心と意欲を旺盛にしてほしい。

われわれの大学は美術科と英語英文科という、最小単位の「総合大学」である。その二つの学科の総合を具体的に実現しているのが一般教育であり、美術の学生も英文の学生もともに一つの教室で学んでいる。美術科が四年制の美術学部となった暁にもますます大学全体の交流と総合をはかつていきたい。

基礎ゼミ

ゼミとはゼミナールの略称で、英語のセミナーである。演習ともいうが、教師よりも学生が主体になって発表したり、討論したりする形式をいう。

「基礎ゼミ」は基礎的なさまざまな問題を

考えるところから名づけられたが、普通の講義科目にはない今日的な、あるいは根本的なテーマを扱っている。それも二十人から三十人ぐらいの小クラスに分かれているから、自分のやりたいと思う問題を発見し、よい友人と教師に出合うことができるだろう。一九七八年度のテーマはつぎのようである。

- 「からだとの対話」
- 「暮らしをデザインする」
- 「個人と国家―個と類」
- 「生活を見つめる」
- 「技術と人間」
- 「聖書をどう読むか」
- 「新聞・雑誌・本を読んで考える」
- 「色彩体験と主体性」
- 「映画制作・不思議な国のアリス」
- 「自分自身を掘り起こすことから始めよう」
- 「子供の本を読む」
- 「さまざまな差別について考える」
- 「肥後守による造形」



一般教育複合講座



基礎ゼミ「個人と国家―個と類」



読書室